

産まれてくるとき

濱田湧壮（熊本大学）

出産とは殺人である

という言説がテレビで流れている

母が 違うのにね と言う

限りあるいのちを与えたのにね

僕は そうだよね と言う

僕は詩を書いているのだ

母について書いていて

これを読んだら母は

深く傷つく

僕はそれを確信している

置物のような暗いシワを顔に貼り付け

昔 僕のものだった部屋で母は眠る

棚にはフランス人女性についての本や

宗教じみたパッケージの加湿器や

小学生の僕が書いた短い手紙が並び

いま顔のシワについて書くだけで

母は腰を抜かしてしまう

最近 腰を悪くしてしまったのは

たぶんそのせいだと思う

兄はちゃんと切り分けて考えていて

僕にビンタをする

そのあとで

ビンタをする と言う

これは同じ事じゃないだろ

僕は そうだよね と言う

僕には昔 眠るときに

おはようという癖があった

そうしないと怖くて

眠れなかったのだ

そのせいで家族は

毎晩うんざりしていたし

泊りに来た友達の

眠りを妨げてしまったこともある

笑いすぎて眠れなくなった友達

は理解できない と言い

いまでもその話を蒸し返す

自分の恐怖を押し広げて

ひとの恐怖を推しはかると

僕は殺人鬼にならなければならない

「僕は殺人鬼だ」

「殺人鬼は包丁を持っている」

「包丁を持ったまま書店で働いている」

「僕はもう三年以上書店員だ」

カウンター脇で本の発注をしていると 子連れの男性が声をかけてくる 息子が料理をしてみたいと言うんですが 簡単な本はありますが 子どもは小学校中学年くらいの人らしい 大人しそうな男の子 この本なんてどうでしょう お子さん向けに作られているので ふりがなが多くて説明も丁寧です

男性はその本を買う

僕は本を紙袋に入れて渡す

そのときこっそり包丁も入れておく

家に帰ってから子どもは

本と一緒に包丁を取り出す

嬉しそうな顔をする

その包丁で玉ねぎを切り　にんじんを切り　じゃがいもを切り　牛肉を切る
そして指を切る

痛っ

という僕の声に

母が血相を変える

指先から細く血が流れ

野菜や肉やまな板にシミをつくっている

包丁を奪い取られる

やっぱり早かったね

料理はまた今度ね

母は僕の指に絆創膏を貼ると

野菜を捨て調理器具を洗いだす

僕は　ごめんなさい　と言う

ごめんなさい　と書く

ごめんなさい　と思う

兄が　違うだろ　という

お前の指は切れていない

僕の指は切れていない

切れたふりをしている

切れたふりをしている

ひとりは嫌だった

母のお腹のなか

「指切りげんまん」

小指を差し出す